

### 全体アピール

我々はヒロシマ、ナカサキの問題の深さはわかり、今なお我々日本を撃つものであることを確念する。そして1個の人間を置いて、民族、国家の体験である被爆事実は、ヒロシマ、ナカサキの人々が等質にはらんでいないことである。支配が被爆の事実を死者へのメソフクという心情的対応で、しかも平和観光都市として、めざましく復興した広島だけをとりあげて事足りしとしておられるか。我々もそうであっていいはずはない。ヒロシマ、ナカサキにおいての人々は、等質であり、我々の対応も等質でなければならぬ。唯、焼津に帰したから片か都市としてめざましく復興を遂げ、国家の構造の位置を固めて、広島と、国工伸長政策の全水準からすれば、そんな長崎の間には、大々たる落差があり、その落差の不気味さを、支配はナカサキには手を出さぬのか。なにして、ナカサキ、長崎の人々(被爆者)は広島とヒロシマの人々(被爆者)と等質に置けないか、確かに違う何かが存在している。安芸門前の広島と、カクレメリシタンの長崎で、ことが同じように現れるはずはないか。

広島、長崎、8.6-9集会及び、それに続く長崎撮影行動を提起するにあたり、対象課題である広島、長崎の具体性のみならず、我々は我々自身の位相の問題、自己とその行為が世界へと至ってゆく時空の変遷に関して語る必要はない。そうした認識をまたぬき、渾身のエネルギーを消費していったことを忘れてはならない。

「快樂なことをするには力は成立しない。」これは吉本隆明の言葉だが、これをまともに受けとるから我々は運動における快樂の拠りどころを変えねばならない。以前、運動の快樂は、運動のなかに空気のようには存在していた。個の実在の求められているものは、何はともあれ、運動が成立してれば、その関係が維持されていれば、個の実在は満たされていた。しかし、こうしたことはすべて運動が成立しなくなることで、関係維持しなくなることへつながっていた。今、我々は、こうした思惟を拒絶しなくてはならない。個が自己の問題意識をどうすまし、そのことにより運動が何ごとかをなしとけることに最大の快樂の空間を獲得しうる体系を考えるべきであろう。

8.6-9集会への動機は、直接的には、広島、長崎のことを問題にしなから、そうした意味では、我々が現前している全課題の展開への誘合石なのである。我々はこれを断固として取り扱ってゆき、多くの飛刀が意志の参加を期待してやまない。

# 「広島デー」 概 括

「広島デー」は1968年、6月、全日本邦合宿に於いて、全日の当時のメインプランの一つとして決定された。「広島デー」という名称もその時、決定された。その名称に関しては「R6広島デー」もあることにはあるが、その時、広島は単なるヒロシマとして取りあつかうのではなく、「広島の日々」として、もっとそこでの人々の現在の時局的な実相を取り扱うものとして、また、「我々の広島における日々」そのすべてを問題にするという理由に基づいて成立していた。直接的には「広島デー」は又つ全日の大きな流れの中に生まれた。ひとつには、それまでの全日の写真の展開の課題であり、もうひとつは、67、10、8羽田以後の急進的な時代状況に對応して生まれた④からであった。評述すれば前者は1965年に伯と写真という定立から写真を現代の中を伯が生きていくことの課題としてするること、つまりなりにも成り立ち66において伯的な限りにおいて、更に具体化し、そこに於いて伯的な限りにおいては又なりな程度まで伯と世界の関係を成立させていた。そして伯において、写真のそうした伯的な意図を越えて、類的な能動性を獲得せんと、他者の在り様に向けて、全面的な展開を期していった。伯々人は撮るにその水をやりきとうと努力した。しかしそうした努力が本質的なものであればある程度、主体は自らの日本の情状の中で、深く傷つき内向的なうざりを得なくなった。もはや伯々の努力の域を越えて、問題は大きくなった。伯々の内題意識と努力の集積によるプラスαが必要だった。そして、一斉そうした努力は10、8羽田の衝激皮層に大きく揺さぶられ、又なり現象的表層へまなざしの矛先を向けていた。

暗黒探察、試考錯誤の中で④は形成された。そして、不明不暗にカマワらず、又なりの人的エネルギーの集積をさせた。しかしながら、伯々の行為の集積は④からでは、我々の骨髄に遠くから、伯々の思われなつた。ともすれば、写真がバネを握るという二層捉へに自分の足元を見失ない足力行動の巨匠としてのカマワれる。しかしそれでは今までやってきたことは向かったのか。そうした表層の衝激皮層をいかにしたら、我々のメインテーマであった。日本の基層は遠くはせくがしえるが、その率多くの人にとって言外の課題として表出してきた。

そうした中で生まれたのが「広島デー」である。すでに我々は、広島、もしくはヒロシマが原水爆運動の既成在翼の力量を越えていたこと、そうした中で、ヒロシマの本当の主体であり、被害者である、被爆者~~を~~は更なる課題とぶちあたっているであらうことを知っていた。それは実行にあたり更に具体的に確認された。多く言語が使われ、ハリア、非人、差別される生き残りければならぬ、抑さしき殺意、仇くこと資本主義等々それらすべて今の人間の生活の問題と密着してないものはなかった。生活、その言語はすべて要約した。今の人間の生活、支那の具体性を映像に映し再現し超越することそれが「広島デー」

に与えられた任務であった。それは、68年8月から71年8月迄の  
 丸3年間に遡る歳月と、11回にわたる撮影行動と4回のロケハ  
 ン、また、又回の大まな展覧会をへて一冊の出版物となりえた。  
 その11回にわたる撮影行動に於て、各々どういうことか肉題と  
 してくみあげられ、それに對しどう判断しどういう手法が組ま  
 れていったかを多少なりとも明らかにし、広島やヒロシマを通  
 じて現人に回った一冊の写真集の生成の「史」とその身体の内  
 容をいくばくなりとも解きたいと思う。

68.8.27~7.オ一次

すでに述べたように、多くの旧のうち例に、「広島デー」に参  
 集する契機は二められていた。幸あたらけハニが行なわれ、ア  
 ビールも作られ、「広島デー」は、パラニニニから実行へと短  
 時間に発展していった。50名近い人間がカメラをにぎししめ  
 広島へやってきた。そうした甲ではじめての全日全作の専任撮  
 影行動はその幕を切って落された。

一番はじめたやられたことは、広島市街地図を張り出しこと  
 とはどんなところか何かあるかを説明することだった。はじめ  
 てということもあり、また手に式典が中心だった為、その時間  
 的終局、「平和行進」はいつとどうはじまって、云々、があつて  
 それぞれのようになつて、そのように終った。写真集だけであ  
 るく映画も作る予定だったの、そのフィルムや録音機の手配な  
 どが大変だった。なにしるオ一次は僕大なるエネルギーをもち  
 参考した人々の旧々の広島であり、それは朝日や専任の担当者  
 制(これは写真機を主として撮るはそれなくして成立しえない)  
 の手形態から、帰るところP.Cの式典であった。

あまり面とらみのいい専任撮影行動でけつた。たが他々のエ  
 ネルギーを茂させるとは車アキアアア。その時後新聞に僕達  
 のことか「式典荒しのカメラマン」として書かれておき、僕達  
 は早速善後策を授けした。(確々にこの手は自身を撮るうは剣  
 と前年なことだが、このことかあつて又店か次の手回らえら  
 くむかかしかつた。

オ一次の終り 7.オ二次 9月

この間おに映画の為にロケハンが行われ、市内観光バスのか  
 らどの録音や撮影物のアニガルの授けると実行された。

オ二次

オ一次からオ二次の展開は急む急だった。又週間位の授けく  
 覚えていゝのは季節で写真セレクトの為のベキキエフをしてい  
 たらすの道を日大のデモ隊かとあり「古田をたおせ」なら「佐  
 藤を古おせ」へとエスカレートしたシユアレヒユールを(こり  
 こ「あ、や、つてるなあんばうだ!!」と思った)そして押しの  
 時間しななくその授けは現地人から込められた。そにて於てはじ  
 めて我が問題にする広島が残暑の陽ざしの中、浮かびあがった。  
 そこではひとりひとりの心算しを写真で表現、総括すること  
 と、その果の、今の広島に至るはどうしたらいいなが問題に  
 まで、~~そにて対策~~



り返って筆の本質を論じているから犯罪的であると云、僕達はやはり元来筆を武器とするべきであらう等々、おそろしく遠くへ至りすぎるくらいの話し合いがなされた。だけれどその中で、広島・ヒロシマという既成の視点をこえたル・シマを見出し無限のぬかるみを歩くべく想いを新たにした。そうした中でオマケは行なわれた。討論は徹夜をきわめここで終る筆の「広島デー」は終るなかった。

### オ5次

すでに僕達は広島やヒロシマを超えた。いうならば日本とその戦後20年間の筆全体と向きあうべきことを確認していた。オ5次にはいく人かのオ5次生が抜け去った後で、朝と時局も余裕をもって行なわれた。メインテーマは、今の広島の生活ということであり、その具体性に至ることだった。そこでとらえた筆、それは、社会を政治と経済に分けるなら、それだけ人間が労働することに向ったもの当然かも知れないが、その経済的側面の問題の多い写真だった。一斉、この頃から出版の為の資料書や、自己年表を作る動きが荒れ出し、それは今まで知らなかった色々の筆尖を明らかにしていった。

### オ6次

「広島デー」を終らすにはもう一度式典を撮らねばならぬことだ、すでに提起されていく、ここには式典を式典としてこのみとまのこはなく、また式典と人とを分離して把握する手法ではなく、いうならば、P.6式典を思いつくことによって、僕達のやらんとする全体へ至ることと考えられた。69、8、6は平和公園を始め武装ヘルメット集団が埋められた。しかし、いつの間にか我々は、そうした戦争行為と人々の日常性の間に介在するものた気をとられていく、心の深では、無精に「平和公園」をヘルメット部隊が埋める上筆を期待していたくせに撮り切れなかった。

### オ7次

9月には広大戦争があり、時代は明々たる年11月1日戦へと突入していく感があった。そうした中で、再び「広島デー」は過去を揚棄したテーマを思い出させた。

それは生活に對立する支配ではなく生活の中にある支配が撮れていない。その言葉によってまず露起された。人々の日常性の再吟味と、都市空間における被爆の今日性かとりあげられた。しかし「広島デー」は「加担する」という言葉によって生活と支配の関係を表現したが、それは、ある意味ではやさしすぎることはあり、攻撃力を欠く言葉だった。そうした再度から生活をとらえるのこはなく、支配の根拠が人々の生活そのものの中にあることを撮るべくオ7次はあった。しかし人々の生活の日常性は、その抜かをとらえないまま、またもろにされた。

### オ8次

ここにおいて、我々は、人々の生活に對して、ある自解を持つに至った。~~それは写真撮~~

つに至った。それは写真撮当や資料作成、また自ら生きていくこと、そのすべの吟味をとうして。

我々は「我々は生きていく」と考えた。我々の視界からは、今の生活には一切の可能性はなく、たとへん生きていくという動かしがたい事実なるものをとらえても抑えしその生けずきを持たない空しい生であることを確認せざるを得なかった。

### 才9次

そうして人々をささえる心理的拠拠のふとつとして、安芸内純の事か資料の「なぜ原爆は投下されたか」において明らかたされた。現世の苦悩を現世においてなんともしなれず、来世に託す。その事により現世への諦念が成立し、そこで生きている矛盾やあつれきを何の心情的範ちゅうにおいて処理してしまふ。そうしたすべで、この旧家体利の甲では、結局は、じゅうりんさかていく生き方であること、その物質的基盤である寺所へ撮影が及けらわった。寺所の存在性に対して

### 才10次

10次は、この本の転換のふとつをなしているがそれは、70年に入ると、広島が根本的に変化したことによる。そうした変化の具体性を明確にしなければならなかった。また、そのもとづけるおのまうにエーゼックがあり、広島の人々か、旧家体利による人間射殺に拍手かっさいした不気味さかあった。

確かに広島は随分変わった。それまで近代中央の攻撃に耐えかっそり答えていた広島は積極的にかそれをとり入れるようになった。段原の都市計画等、見えな、所な近代が広島をおおいつくしていた。スラムは種々な理由で「スラム」ではなくなつていった。

### 才11次

さ度おのまが撮られた。唯一のものは以前のものと全然違つていた。至らエスカレートした。首指か花し、それを阻止しようとする人が無数にいた。

## 長崎からの報告

昭和20年8月9日、長崎原爆は、かつて生を残った人々の心にはかり知れぬ痛く悔しさを残したが、27年間の時間の推移のなかで8月の恐怖は時間的風化作用を受けて癒える。

今年もまた、南の国、長崎にめぐり来る夏、この暑熱は人間の生かじりうと燃焼してしまふかのような錯覚をもたらし、青空にもくもくと聳立する積乱雲の上昇を見れば、人間の生かその下で圧死とれるかのごとくと幻影が立ちあがる前夜、8月の平和式典＝国家司祭は国家権力の裏返しのかたちとして露呈する。

相も変らぬ平和幻想の鼓舞。

27年前の原子野は、いまや一大国際観光都市として虚飾に塗られた都市の内側に堅く閉ざされてしまひ、原爆の爪跡は、明るく陽光のなかにそそり立つ平和祈念像へと様相を変えられてしまった。

被爆者の27年間、どろどろに生をこぼした生は深い空に吸い込まれてしまひ、さうな焦燥に、海に生をこぼれをらす。

浦上地区八千人の爆死者とその被爆家族は、心のなかでの憤りを祈りと黙想に変える。

「原子爆弾が落ちたのは大なる御摂理である。神の恵みである。浦上は神に感謝せねばならぬ。」、「浦上の聖者」「原子野の光」などという冠称のもとに、被爆を一身に体現したかのごとく、感情過多の文章を臆面もなく、発表しつづけた「永井隆」。彼は「聖者」として、カトリック信仰を文面に歌りほめることと歪曲化し、あたかも厚顔無恥に信仰の教理を確かめるかのために添へられたとリウキウキな荒唐無稽な感想を書き散らし、ジャナリスムは、厚顔無恥に彼の著作をもてはやし、以後永く、原爆段下への独善的なカトリックエゴイズムともいえる彼の解釈が、かたがたの規制力をもって、長崎の人々の意識の底へ降りかかっていくなかで、1972年の原子野に屹立して（）る平和祈念像を訪れる観光客と、その前で記念写真を撮る乗客と平和に彩どられた「長崎」のなかで、「生」が奪われ被爆アガサガ、片隅へと押し込まれてしまっている、今我々にとって「長崎」とはノーモアアガサガといったところの感情の後入ではない。

ある巨大な激烈な民族体験としてアガサガを共有するのは事実である。

しかしながら、果して日本国、日本人が唯一の被爆国であり、被爆国民であるか。

今なお、原爆症に苦しむ朝鮮半島の人も我々はどう受けとめればいいのか。

朝鮮人被爆者、孫振斗氏は、1970年12月3日、原爆症の治療を求めて命をかけて日本に入国したが、日本国政府は、彼を不法入国者として強制送還の処置にしたのである。

大東亞戦争時、国家権力は400万の朝鮮人民衆を駆りたて、日本に強制送還し、様々な苦行に付いた歴史的犯罪の事実を忘れることはできない。

この内、広島4万、長崎3万の人々が被爆し、亡却という自然の風化作用をまともに受けて、宗教と虚像のなかに押し込められ、この従軍慰問隊の具体的な対峙に向い得ないかぎり、個々の人間の実存的な追求の在り方のなかからは真の「長崎」の意味には到達し得ないことは疑い得ない。

我々の前に現出しているのは27年前の「ナガサキ」ではなく、1972年の原爆野に屹立してゐる平和祈念像を訪ねる歴史的観光客とその前で記念写真を撮る平和と繁栄と平和に祈りた「長崎」が在るのである。

我々が対峙するのはこの長崎であり、繁栄と虚飾に塗り込められた平和像のなかに、「ナガサキ」が如何に圧迫され片隅へと押し込まれるなかで、「生」が奪われていくことを見せつけ、見せつけ「長崎」の虚像の崩壊から実像の掌握のためにこの虚像を維持している主体への戦いを挑み続けなければならない。

彼女達のケロイドと我々のケロイドを互いにこすりつけることによって、我々の「ナガサキ」への提議行動は、自己の内面を通過しつつ、なによりついた地点は、「ナガサキ」とは我々に何と何であるのか」といって初見とモリウベを問ひかけであった。

この問ひかけのなかで、我々は苦しく、多く自己の身体を下降させるほか身も保ち得ず、自己の生を存することの立証を求めながら、ナガサキの被爆者と被爆者以外の人間の生をどう見ようとするのだが、長崎の現実の事象が人間の有り様をなかに、我々は拒絶され、はねとけられ、七転と立ちすくむのみであった。

暗黒の深淵に身を立せしめる我々、不自由とに取り囲まれながら幸福幻想のなかにいる我々が、いまこの現実世界に問う視点を洗い出すなかから、我々内部の個々の相克と、止揚の上に対象「ナガサキ」をせり上げ、我々の自己内部と、対象「ナガサキ」に両刃の力は突き刺すなかから、我々にとって被爆とは、戦後とは、国家犯罪とは何か、「ナガサキ」のとは何かを問うべく問ひを激烈な行為をもって始めなければならない。

## hirowajima - 大田洋子伝

母の再三の結婚は、九歳の私の魂に真赤にぬれた一本の糸筋のような傷をひきつけた。洋子は尋常でない運命を、幼い日既に意識させられた。連れ子として暮さねばならない混濁くどい家。それゆゑに遠慮や憎しみが集まっている中で、一筋の光のような、一葉のような、俊子のような作家になって自立する事を日々夢見た洋子であった。

妻子ある男とかけおちし別れ、生涯ただ一人の子、蕩子をも棄て、セネカやダンサーをやめてセネカと書く事続け、ヒロシマ以前数年間セネカ文学の一角に名を連らねた洋子だった。プロレタリア文学の作家が次から次へと戯殺されていく時私には書けないと吐きあげくは、日支戦争を讀えんばかりの文章も書いている。しかしあの「ピカ」が洋子の道を大きく変えた。

1945年8月6日、B29エノラ・ゲイ号は原爆を積んで、快晴の広島上空に飛来した。午前8時15分、世界初の原爆が広島上空1800フィートで炸裂した。その直後、広島市内では数10万人の人が、一瞬にして命を奪われ、重症を負った。

— せんべいを焼く職人が、あの鉄の蒸焼器で一樣にせんべいを焼いたように、どの人も全く同じ焼け方だった。普通の火傷のように赤味があったところや白いところがあるのではなく、灰色だった。焼いたというより焙ったような、焙った馬鈴薯の皮をくるりとむいたように、その被膚は肉からぶらさがっているのだ。—

— 河原はふたたび潮がひいたけれども、そこではもうそろそろと死の幕がひらきかかっていた。うつ伏せて死んでいる人、仰向いて死んでいる人、草の上に座ったまま死んでいる人、そしてうろろと、うつけ歩いてる者は、ぼろ(襤褸)をさげ、ばさばさの髪をし、とげとげしい顔をして眼だけきらきらと光らせているのだった。—

— 道のまん中にも死体がころがっていた。死体はみんな病院の方へ頭をむけ、仰向いたりうつ伏せたりしていた。眼も口も腫れつぶれ、四肢もむくむくだけむくんで、醜い大きなゴム人形のようなものであった。— (『屍の街』)

耳と背中に傷を負った洋子は、傷を負った母、妹、妹の赤ん坊と共に、この一瞬にしておとされた壊滅のカレキと灰色にころがる死がいと死臭に満ちた〈街〉を西に辿った。

眼をおおうような死骸が散まらる中を歩いている時、姉と妹はこんな会話をかわす。  
「お姉さんはよくごらんになれるわね私は立ち止って死骸を見たりできませんは」  
「人間の眼と作家の眼とふたつの眼で見ているの」 「かけますか、こんなこと」  
「いつかは書かなくてはならないね。これを見た作家の責任なもの」

洋子にとっておごたらしい戦争はこの日から始まった。それを見たということが、死ぬまで洋子ととりえず離れずないのである。

『屍の街』の序文に洋子はこう書いた。— 「私は1945年の8月から11月にかけて生と死の糸を一重のあいだにあり、いつ死のほうに引き摺られていかれるかわからぬ一瞬を生きて

「死の街」を書いた。生き残った人々の上に、原爆症という恐ろげにみちた病的現象が、  
現われ始め、人々は果敢と死んで行った。私は「屍の街」を書く事を急いだ。人々のあ  
とから私も死ななければならぬとすれば、書く事も急がなければならなかった。—

何となく原稿用紙はおろか、一枚の紙、一本の鉛筆もなかった私は、村の知人や寄寓  
先の家に降りかかるとはかした茶色、に煤けた障子紙やちり紙池、二、三本の鉛筆をもらって、  
背後に死の影を背ったまま、書いておくことの責任を果してから、死にたいと思った。—

無中で始めた洋子であったが、その作業は困難だった。—「しかし、なんと広島原子  
爆弾投下による死の街こそは、小説に書きにくい素材であろう。それを書くために必要な  
新しい描写や表現法は、容易に一人の既成作家の中に見つからない。私は地獄とい  
うものも見たこともないし、私教のいうそれと認めない。人々は誇張の言葉を見失なっ  
て、しきりに地獄といったし地獄園と言った。地獄園というでさあいの存在を認めら  
ないものゝ名で、そのもの清さが表現できるものならば、簡単であろう。先ず新しい描写  
の言葉を創らなくては到底真実は掘き出せなかった。—

洋子は二重三重の苦しみの中で書く。  
「書くためには思いおこさなくてはならず、それを凝視していると、私は気分が悪くなり、  
吐き気を催し、神経的に腹部がどくどく痛くなった。—

書かなければならぬ」悲壮に思いきめて書いた。昭和二十年十二月悲痛な思いで  
書き上げられた。

しかし本は出なかった！ 占領軍のアレスコード（言論弾圧体制）の時代、  
真中で本は出なかった！

二十二年の初め頃、本が出てないにもかかわらず、諜報部から日本人通訳と二世将  
校が広島県の呉高島村にいる洋子のもとにやって来た。そして質問が始まる。

二世将校は「あなたに原子爆弾の思い出を忘れていただくとは思いません。アメ  
リカはもう二度と再び原爆を使う事はないのであから。広島の出來事は忘れていただきた  
いと思つて。」洋子が答える。「忘れる事はできないと思つて、忘れたいと思つて  
も忘れる気がしません。市民としては忘れたいと思つていますが、忘れるという事と書くとい  
うこととは別です。—作家は書きます。忘れる事をお約束はできません。

アレスコードによって目を切られた記者や、つぶされた出版社が続々とあり、反した時  
は沖縄に送つて重労働をやらされるという時代の中で「日本で出版できなければ、アメリカ  
のアレスコード（諜報部）」と言いつつ切った。

この頃洋子は、共産党員の箕中某と二年足らずの結婚をしている。相手に子捨てまで強  
いた異性愛者だった。しかし古い女の感情と仕事への情熱という矛盾をどうしようもなかった。  
希望と落胆と焦燥の日々をうらに、二人で「しばしば死が言われ、泥沼のような明け暮  
れが続いた。「人間を愛する文学を書きほさす」という言葉を残して彼は去って行った。  
その「人間を愛する」という言葉が洋子になきく残った。

昭和二十五年の初めにこの言葉をたいて「証筆」が始まる。

S. 25年

原爆を吐き出してもおしなから、原爆症の恐怖におわけながら、睡眠薬や抗ヒスタミン剤の常用で頭を麻痺させながら書いた。当時の一枚の写真が、その事物語る。異常に暗く、パーマネントののびた髪は、梳くの忘れかけたように垂れ下る。頬から身にかけて痣のようにしみが広がる。眼は全く輝きを失って、ただぼくと開かれているのみ、一度に十人以上も年を重ねてしまった様な姿で写っている。そこで書かれたのが「人間襤褸」である。

この書が終えた翌年洋子は、とうとう不安神経症という症名で、東大の神経科に入院する。『人間』の中にその時代の不安と、その中でも生きようともかく洋子の苦しみがありどうか見える。

原爆作家と呼ばれる事を兼ねる作家の小田篤子(大田洋子)が大学の神経科に入院する。意識の覚醒と半覚醒のあいだに横切るさまは回想。黒い赤ん坊を生んだのは原爆の同窓会。原爆被害者であらういってストリップの家の女中としての女。原爆がいつか来る。来るかわからない不安。二十五年六月に勃発した朝鮮戦争が、三、四年の大戦への様相を呈してくる。連日、日本の基地から米爆撃機が朝鮮に向けて飛んでいく。原爆がまたおとさぬ。松川事件、下山事件、白鳥事件が相次ぐ、思想の抑圧が明らかに行きわたる。「チャタレイ夫人の恋人」「親者と死者」の発表、言いたいことが言えない。と、すぐらい不安――

その後、ロミオに迫る洋子の最後の最も報擁なたかひの記録といえる『風の街と人』が、暗い時代に書き上げられた。

主人公の小田篤子(大田洋子)は、1953年の夏、崩壊の街、広島を訪ねる。篤子は母の住む基町住宅に急ぐ。基町住宅は終戦直後に市の立てたバラックの被災者住宅だが、今ほとんどの家も朽ちて壊れかけ、雨がふれば、水道も瓦礫の設備もない。窓は壊れかたかた、何千軒ともしれない集落に得体の知れない悪臭がただよぶ。篤子の居住者たちは、「石ころと雑草と糞尿と塵埃の山を埋めた悪臭の町に住み馬鹿な、どこかどんだ底であることに麻痺している」。篤子はまた不法住宅の君靴、相生スリとあぬ。原爆で身よりを全て失った者、養育を引き場者一家で、酒を造っている朝鮮人の母の奥中まで道具を並べ立てている仕切屋の亭主、「とにかく戦争せにやらん、原爆で身内の者七人も失うたけねえ、あしやくしゃして、どこでもええ戦争せにやらん。」とあぬ。篤子の合った人々はまた、ロミオをえて市に不満をぶちまける。立ち退きばかり要求する。基町の住宅はいこう立てが、しゃにむに緑地帯、公園とうたいせ上げ、わり込んでくる。道路はなるのてはと言われる、百米通、統計をとるだけのABCCの悪評。

東京から来た整形外科医、神山が耳がない人、唇がない人、両足の指が全部後向きの人、首がわからない人、の手術手術をすることになった。その場に立ち合った篤子は、神山の、泣きながら、その光景をノートに書き止めていく。そして思う、「これを見よ、人々よ、これを見よ」と。また神山弁護士は、米口に対して損害賠償の積熱的な話をして



写真集「ヒロシマ・広島・Ninon-Simoda」販売作戦及び広島から長崎へ86-89行動予定

7/3 10 20 8/1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 20 9月 10月 11月 12月

シナリオナリ 本4冊  
 内閣集販売(地270ランの中で) → 攻撃目標リストアップ(外部一般写真員団体・図書館)  
 外部サークル 書店・図書館  
 内閣 (学際)

全回キヤンペーン

長崎撮影行動  
 長崎撮影行動

長崎撮影行動  
 全国下ビル

地区本部集約

現像し  
 現像し

長崎三ノボシラム

長崎撮影

長崎総集

広島三ノボシラム

広島撮影

広島総集

広島オ一陣

総合パンフ

広島  
 長崎  
 (最低7名+理斗)

攻撃目標リストアップ(外部一般写真員団体・図書館)

内閣集販売(地270ランの中で)

8.6 長崎へ向け  
 8.9 長崎へ向け  
 現地報告書

11-76101 No.3  
 現地の人々行動隊員  
 86-9230資料下  
 長崎の資料下

「長崎」  
 「長崎」

「広島」

8.8-10  
 8.9式典を

長崎  
 長崎行隊

資料下ビル

販売(広島から長崎へ) (資料)

の及  
 我々は何に何を生きる

10 三ノボシラム  
 今の世界状況の中

9 折念式典  
 現地のあつがる人同様に

8 長崎総集  
 資料「ヒロシマ」

7 7:00 シノボシラム  
 写真展系  
 「ヒロシマ・広島」

テモ  
 灯籠流し

折念式典  
 折念に祈りに来る遺族達

5 8.6 決戦行動内容決定討論  
 折念式典  
 折念に祈りに来る遺族達

5 街(広島おとり)平和行進  
 折念式典  
 折念に祈りに来る遺族達

6:00 折念集會  
 折念に祈りに来る遺族達  
 折念に祈りに来る遺族達

8/4 6:00 折念集會  
 折念に祈りに来る遺族達  
 折念に祈りに来る遺族達

全体下ビル  
 太田母子激烈伝  
 長崎の総括  
 広島から86-9に向けて  
 地図(8.6行動地図)  
 今、広島の問題に  
 被爆二世(86-9に  
 関係)について  
 日桂とどこへ何の集  
 会があるか

## 「広島デー」概括

「広島デー」は1968年、6月、全日本部合宿に於いて、全日の当時のメインプランの一つとして決定された。「広島デー」という名称もその時決定された。その名称に関しては「8.6広島デー」もあることにはあるが、その時、広島は単なるヒロシマとして取りあつかうのではなく、「ヒロシマの日々」として、もっとそこでの人間の現在の営みを取り扱うものとして、また、「我々の広島における日々」そのすべてを問題にするという理由によって成立していた。直接的には「広島デー」は2つの全日の大きな流れの中に生まれた。ひとつには、それまでの全日の写真の展開の課題であり、もうひとつには、67.10.8羽田以後の急進的な時代状況に対応して生まれた①からであった。詳述すれば前者は1965年に個と写真という定立から写真を現代の中を個が生きることの問題として考えることに、まがりなりにも成功し'66において個的な限りにおいて、更に具体化し、そこに於いて個的な限りにおいてはかなりな程度まで個と世界との関係を成立させていた。そして'67においては、写真のそうした個的な意図を超えて、類的な能動性を獲得せんと、他者の在り様に向けて、全面的な展開を期していった。個々人は様々にそれをやりきろうと努力した。しかしそうした努力が本質的なものであればある程、主体は自らの日本的情況の中で、深く傷つき内向的にならざるを得なくなった。もはや個々の努力の域を超えて、問題は大きかった。個々人の問題意識と努力の集積によるプラス $\alpha$ が必要だった。そして、一方そうした努力は10.8羽田の衝撃波に大きく揺さぶられ、かなり現実的表層へまなざしの方向転換を迫られていた。

暗中模索、試行錯誤の中で①は形成された。そして、不明不暗にかかわらず、かなりの人的エネルギーの集積をしえた。しかしながら、'67迄の行為の集積は①だけでは、我々の骨髓に迄貫くプランとは思われなかった。ともすれば、写真かゲバ棒かという二者択一に自分の足元を見失い実力行動の直裁さにひかれる。しかしそれでは今までやってきたことは何だったのか。そうした表層での衝撃波をいかにしたら、我々のメインテーマであった。日本の基層に迄はせくだしえるか、その事が多くの人にとって言外の課題として表出してきた。

そうした中で生まれたのが「広島デー」である。すでに我々は、広島、もしくはヒロシマが原水禁運動等の既成左翼の力量を超えていたこと、そうした中で、ヒロシマの本当の主体であり、被害者である、被爆者は更なる課題とぶちあたっているであろうことを知っていた。それは実行にあたって更に具体的に確認された。多く言語が使われ、パリア、非人、差別される生きなければならぬ、やさしさ、殺意、働くこと資本主義等等それらすべて今の人間の生活の問題と密着してないものはなかった'生活'その言語はすべて要約した。今の人間の'生活'と'支配'の具体性を映像において再現し超越することそれが「広島デー」に与えら

れた任務であった。それは、68年8月から71年8月迄の丸3年間に遡る歳月と11回にわたる撮影行動と4回のロケハン、また、2回の大きな展覧会をへて一冊の出版物となりえた。その11回にわたる撮影行動に於いて、各々どういうことが問題としてくみあげられ、それに対しどう判断しどういう方法が組まれていったかを多少なりとも明らかにし、広島やヒロシマを通して現人に向った一個の写真集の生成の歴史とその集合体の内容をいくばくなりとも解きたいと思う。

#### 68.8.27 第一次

すでに述べたように、多くの個のうち側に、「広島デー」に参集する契機はこめられていた。事前にロケハンが行われ、アピールが作られ、「広島デー」は、プランニングから実行へと短時間に発展していった。50名近い人間がカメラをにぎりしめて広島へやってきた。そうした中ではじめての全日全体の集団撮影行動はその幕を切って落とされた。

一番はじめにやられたことは、広島市街地図を張り出してどこはどんなところで何があるかを説明することだった。はじめてということもあり、また主に式典が中心だった為、その時間的対応、「平和行進はいつどこからはじまって、云々」があつてそれは嵐のように始まって嵐のように終わった。写真集だけでなく映画も作る予定だったので、そのフィルムや録音機の手配なども大変だった。なにしろ第一次は莫大なエネルギーをもって参集した人々の個々の広島であり、それは期日が集団的検当体制(これは写真検当が主だが集撮はそれなくして成立しえない。)の年形態から、帰するところ8.6の式典であった。

あまり面倒見のいい集団撮影行動ではなかったが個々のエネルギーを 焼させるには事欠かなかった。その時 新聞に僕達のことを「式典荒らしのカメラマン」として書かれており僕達は早速善後策を検討した。(確かにこの年は式典を撮るのは割と簡単なことだが、このことがあつてか否かの次の年からはえらくむづかしかつた。

#### 第一次8月から第二次9月

この間に映画の為にロケハンが行われ、市内観光バスのガイドの録音や撮影物のアングルの検当などが行われた。

#### 第二次

第一次から第二次の展開は急も急だった。2週間位の検当(覚えているのは学館で写真セレクトの為にベタチェックをしていたら下の道を日大のデモ隊がとおり「古田をたおせ」から「佐藤をたおせ」へとエスカレートしたシュプレヒコールをしていて「ああやってるながんばらねば!!」と思った。)そして伸しの時間しかなくその検当は現地へ持ち込まれた。そこに於いてはじめて私の問題にする広島が残暑の陽ざしの中、浮かびあがった。

そこではひとりひとりのひろしまを写真で表現総括することと、その果の、今の広島に至るにはどうしたらいいかが問題にされて、そこでの対

象課題としての広島に対しては〈都市広島〉やそれを明らかにする為の近隣地区をはらんだ〈拠点思想〉が提起され、また還元的視点として〈写真集イメージ〉が提起された。ものすごいいきおいで皆撮り始めた。とりわけ〈都市広島〉は〈中心地〉と〈スラム〉へ 重点的に撮影しかれていった。

ここにおいて、僕達は、僕達の最初段階における数しれない各画を抽出しえた。ここに於て集団課題の広島と、自己課題のひろしまは止揚され、個の撮影段階へまではせくだつていった。僕達は第二次に於て「広島デー」の組織的骨格を作るのに成功した。

#### 第二次～第三次

第二次以降の写真検当は困難さをきわめた。僕達はキャビネでは大きすぎるし金もかかるということで、手札にやりためんこみみたいな写真をいじりながら、いつはてるとも知らない討論に時間をついやした。レーニンの「国家革命」の読書会を催し、そこから我々の問題を抽出したりまた、68.10.21における広島での斗いをロケハンしたり、またレポート広島デーをつくったりした。第二次の〈写真集のイメージ〉はもうすでに更新されねばならなかった。また新たなる問題設定が不可欠だった。その中で〈都市広島〉から〈ヒロシマ〉というアンチテーゼの問題提起が行われた。それは〈都市広島〉をいくらつきつめても、結局は〈中間支配〉の〇の中水平的に拡散するだけで至るべきところを持たないことによる。そうした中で〈都市広島〉の個別性であり、唯一の世界性である〈ヒロシマ〉への対峙が決定された。

#### 第三次

僕達は広島をしゆく巡したあとで、ヒロシマを詰めれば「広島デー」を終わらしうるだろうと考えていた。だから当初、第三次は〈ヒロシマ〉を撮る為のシステムや内容検当に一切の努力がはらわれた。ところが第三次は新なる出発の時であった。そこで終わらしうるであると想ったヒロシマの撮影(主な資料館)は何らものならず、前半は資料館通いみたいなものだったが後半になって、東洋工業の下請けの沢山ある海田にいったらそこにある問題の大きさから前半の〈ヒロシマ〉は再度、新たなる都市広島(ここでの都市は〇体的体制下の産業都市広島ということになるだろう。)に会いそこでの人々=労働者は「広島デー」が今時的にはらまねばならない大きく重い問題を確認させた。そうした中でまたもや、数々の名作が撮られていった。話そうとしても話せないけど、写真を見れば一言もいわずともお互いに分かり撮るべきことが明かになる、そうした雰囲気もあったし、また語りうるにたる写真もあった。

#### 第四次

ここに至る討論では、すべてがその限界までといつめられていった。例えば原爆病院は、唯、治療だけをし、その事により返って事の本質を

隠ぺいしているから犯罪的であるとか、僕達はやはり永久革命理を支持すべきであろう等等、おそろしく遠くへ至りすぎるくらいの話し合いがなされた。だけどその中で、広島・ヒロシマという既成の視点をこえたhi rou-símaを見出し無限のぬかるみを歩くべく想いを新たにした。そうした中で第四次は行われた。討論は徹夜をきわめここで終わる筈の「広島デー」は終わらなかった。

#### 第五次

すでに僕達は広島やヒロシマを超えた。いうならば日本とその戦後20年間の事全体と向きあうべきことを確認していた。第五次にはいく人かの4年生が抜けていった後で、割と時間も余裕もとって行われた。メインテーマは、今の広島的生活ということであり、その具体性に至ることだった。そこでとられた事、それは、社会を政治と経済に分けるなら、しれは人間が労働することに向ったから当然かも知れないが、その経済的側面の問題の多い写真だった。一方、この頃から出版の為の資料書や、自己年表を作る動きが開始され、それは今まで知らなかった色々の事実を明らかにしていった。

#### 第六次

「広島デー」を終らすにはもう一度式典を撮らねばならないことが、すでに提起されていて、ここでは式典を式典としてのみとるのではなく、また式典と人とを分離して把握する方法ではなく、いうなれば、8.6式典を見切ることによって、僕達のやらんとする全体へ至ることと考えられた。69、8.6は平和公園を始めて武装ヘルメット集団が埋めた時だった。しかし、いつの間にか我々は、そうした斗争行為と人々の日常の間に介在するものに気をとられていて、心の深では、無情に「平和公園をヘルメット部隊が埋める」事を期待していたくせに撮りきれなかった。

#### 第七次

9月には広大斗争があり、時代は明かに69年11月決戦へと入っていく感があった。そうした中で、再び広島デーは過去を揚棄したテーゼを追い求めた。それは生活に対立する支配ではなく生活の中にある支配が撮れていない。その言葉によってまず提起された。人々の日常性の再吟味と、都市空間における被爆の今日性がとりあげられた。以前「広島デー」は「加担する」という言葉によって生活と支配の関係を表現したが、それは、ある意味ではやさしすぎることばであり、攻撃力を欠く言葉だった。そうした角度から生活をとらえるのではなく、支配の根拠が人々の生活そのものの中にあることを撮るべく第7次はあった。しかし人々の生活の日常性は、その核心をとれないまま、次にもちこされた。

#### 第八次

ここにおいて、我々は、人々の生活に関して、ある自解を持つに至った。それは写真検当や資料作成、また自が生きていること、そのすべての吟味をとうして。

我々は「我々は生かされている」と考えた。我々の視点からは、今の生活には一切の可能性はなく、たとえ人が生きているという動かしがたい事実からそれをとらえてもやはりその生は本来を持たない空しい生であることを認知せざるをえなかった

#### 第9次

そうして人々をささえる心理的拠点のひとつとして、安芸門徒の事が資料の「なぜ原爆は投下されたか」において明らかにされた。現世の苦悩を現世においてなんとかしないで、来世に託す。その事により現世への諦感が成立し、そこで生じる矛盾やあつれきを個の心情的範ちゅうにおいて処理してしまう。そうしたすべてが、この国家体制の中では、結局は、じゅうりんされていく生き方であること、その物質的基盤である寺町へ撮影がかけられていった。寺町の威圧性に対して

#### 第10次

10次は、この本の根幹のひとつをなしているがそれは、70年に入って、広島が根本的に変化したことによる。そうした変化の具体性を明確にしなければならなかった。また、それを裏づけるかのようにジージャックがあり、広島の人々が、国家権力による人間射殺に拍手喝采した不気味さがあった。確かに広島は随分かわった。それまで近代中央の攻撃に対しひっそり答えていた広島は積極的にそれを取り入れるようになっていた。段原の都市計画等、見えない、汚い近代が広島をおおいつくしていた。スラムは様々な理由に「スラム ではなくなっていった」

#### 第11次

3度8.6が撮られた。唯一のこの8.6は以前のものとは全然違っていった。至にエスカレートした。首相が献花し、それを阻止しようとする人が無数にいた。

## 長崎からの報告

昭和20年8月9日、長崎原爆は、かろうじて生き残った人々の心とはかり知れない亀裂と痛憤を残したが、27年前の時間の推移のなかで8月の恐怖は時間の風化作用を受けて腐蝕する。

今年もまた、南の国、長崎にめぐり来る夏、この暑熱は人間の生がじゅうと燃焼してしまうかのような錯覚をもたらし、青空にもくもくと立する積乱雲の上昇を見れば、人間の生がその下で圧死されるかのごとき幻影が立ちはだかる前で、8月の平和式典＝国家司祭は国家権力の裏返しの際として露呈する。

相も変わらぬ平和幻想の鼓舞。

27年前の原子野は、いまや一大国際観光都市として虚飾に塗られた都市の内側に堅く閉ざされてしまい、原爆の爪跡は、明るい陽光のなかにそそり立つ平和祈念像へと様相を変えられてしまった。

被爆者の27年間、ぎりぎりに生きてきた生は深い空に吸い込まれてしまいそうな焦燥に、疲れた生きざまをさらけだす。

浦上地区八千人の爆死者とその被爆家族は、心のなかでの憤りを祈りと黙想に変える。

「原子爆弾が落ちたのは大きな御摂理である。神の恵みである。浦上は神に感謝せねばならぬ。」「浦上の聖者」「原子野の光」などという冠称のもとに、被爆を一身に体現したかのごとき、感情過多の文章を臆面もなく、発表しつづけた'永井隆'。彼は「聖者」として、カトリック信仰を文面に散りばめることで歪曲化し、あたかも原爆は信仰の教理を確かめるがために落とされたというような荒唐無稽な感想を書き散らし、ジャーナリズムは、厚顔無恥に後の著作をもてはやし、以後永く、原爆投下への独占的なカトリックエゴイズムともいえる彼の解釈が、ひとつの規制力をもって、長崎の人々の意識の底へ降りかかっているなかで、1972年の原子野に屹立している平和祈念像を訪れる観光客と、その前で記念写真を撮る繁栄と平和に彩られた「長崎」のなかに「生」が奪われ被爆ナガサキが、片隅へと押しやられてしまっている、今我々にとって「長崎」とはノーモアナガサキといったところの感情の移入ではない。ある巨大な激烈な民族体験としてナガサキを共有するものは事実である。しかしながら、果たして日本国、日本人が唯一の被爆国であり、被爆国民であろうか。

今なお原爆症に苦しむ朝鮮半島の人々を我々はどう受けとめればいいのか。

朝鮮人被爆者、孫振平氏は、1970年12月3日、原爆症の治療を求めて日本に入国したが、日本国政府は、彼を不法入国のかどで強制送還の処遇にしたのである。

大東亜戦争時、国家権力は400万人の朝鮮人民衆を駆りたて、日本に強制連行し、様々な苦行につかせた歴史的犯罪の事実を忘れることはできない。

その内、広島4万、長崎3万の人々が被爆し蝕し、忘却という自然の風化作用をまともに受けて、宗教と虚像のなかに押し込められている総体の具体的な対峙に向い得ないかぎり、個の人間の実存的な追求の在り方のなかからは真の「長崎」の意味には到達し得ないことは疑い得ない。

我々の前に現出しているのは27年前の「ナガサキ」ではなく、1972年の原子野に屹立している平和祈念像を訪れる膨大な観光客とその前で記念写真を撮る平和と繁栄と平和に彩られた「長崎」が在るのである。

我々が対峙するのはこの長崎であり、繁栄と虚飾に塗り込められた平和像のなかに、「ナガサキ」が如何に圧迫され、片隅へと押しやられるなか「生」が奪われていることを見きわめ、見きわめた時「長崎」の虚像の崩落から実像の掌握のためにこの虚像を維持している実体への戦いを挑み始めなければならない。

彼女達のケロイドと我々のケロイドを互いにこすりつけることによって、我々の「ナガサキ」への撮影行動は、自己の内部を通過しつつ、たどりついた地点は、「ナガサキとは我々にとって何であるのか」といった初発ともいべき問いかけであった。

この問いかけのなかで、我々は苦しく、重く自己の身体を下降させるほか身が持ち得ず、自己の生きることの立証を求めながら、ナガサキの被爆者と被爆者意外の人間の有り様のなかで、我々は拒絶され、はねとばされ、茫然と立ちすくむのみであった。

暗黒の深淵に身を立たせている我々、不自由さに取り囲まれながらも幸福幻想のなかにいる我々が、いまこの現実世界に闘う視点を見いだすなかから、我々内部の個々の相克と、止揚の上に対象<ナガサキ>に両刃のやいばを突き刺すなかから、我々にとって被爆とは、戦後とは、国家犯罪とは何か、<ナガサキ>とは何かを問うべく闘いを激烈な行為をもって始めなければならない。

母の再三の結婚は、九歳の私の魂に真赤にぬられた一本の糸筋のような傷をひきつけた。洋子は尋常でない運命を、幼い日既に意識させられた。連れ子として暮らさねばならない湿っぽく澱んだ家、それぞれに遠慮や憎しみが巣ぐっているその中で、一筋の光のような、一葉のような、俊子のような作家になって自立する事を日々夢見た洋子であった。

妻子ある男とかけおちし別れ、生涯ただ一人の子、夢子をも棄て、女給やダンサーをやって切々と書く事を続け、ヒロシマ以前数年間女流文学の一角に名を連らねた洋子だった。プロレタリア文学の作家が次から次へと戯殺されていく時、私には書けないと逃れあげくは、日支戦争を讃えんばかりの文章も書いている。しかしあの「ピカ」が洋子の道を大きく変えた。1945年8月6日、B29エノラ・ゲイ号は原爆を積んで、快晴の広島上空に飛来した。午前8時15分、世界初の原爆が広島上空1800フィートで炸裂した。その直後、広島市内では数10万人の人が、一瞬にして命を奪われ、重症を負った。-せんべいを焼く職人が、あの鉄の蒸焼器で一様にせんべいを焼いたように、その人も全く同じ焼け方だった。普通の火傷のように赤味がかかったところや白いところがあるのではなく、灰色だった。焼いたというより焙ったような、焙った馬鈴者の皮をくりとむいたように、その被膚は肉からぶらさがっているのだ。-

--河原はふたたび潮がひいたけれども、そこではもうそろそろと死の幕がひらきかかっていた。うつ伏せて死んでいる人、仰向いて死んでいる人、草の上に座ったまま死んでいる人、そしてうろうろと、うつけ歩いてる者は、ぼろ(襤褸)をさげ、ばさばさの髪をし、とげとげしい顔をして眼だけきらきらと光らせているのだった。--

--道のまん中にも死体がころがっていた。死体はみんな病院の方へ頭をむけ、仰向いたりうつぶせたりしていた眼も口も腫れつぶれ、四肢もむくむくだけむくんで、醜い大きいゴム人形のようにであった。--(『屍の街』)

耳と背中に傷を負った洋子は、傷を負った母、妹、妹の赤ん坊と共に、この一瞬にしておとずれた壊滅のガレキと灰色にころがる死ガイと死臭に満ちた<街>を西に辿った。眼をおおうような死骸が散乱する中を歩いている時、姉と妹はこんな会話をかわす。「お姉さんはよくごらんになれるわね。私は立ち止まって死骸見たりできませんは」「人間の眼と作家の眼とふたつの眼で見ているの」「かけますか、こんなこと」「いつかは書かなくてはならないね。これを見た作家の責任だもの」

洋子にとってむごたらしい戦争はこの日から始まった。それを見たということが、死ぬまで洋子にとってむごたらしい戦争はこの日から始まった。それを見たということが、死ぬまで洋子をとらえて離さないのである。「屍の街」の序文に洋子はこう書いた。-「私は1945年の8月から11月にかけて生と死の紙一重のあいだにおり、いつ死のほうに引き摺っていかれるかわからぬ一瞬を生きて「屍の街」を書いた。

生き残った人々の上に、原爆症という恐愕にみちた病的現象が、現れ始め、人々は累々と死んで行った。私は「屍の街」を書く事を急いだ。人々のあとから私も死ななければならないとすれば、書く事も急がなければならなかった。ペン、原稿用紙はおろか、一枚の紙、一本の鉛筆もなかった私は、私の知人や寄寓先の家に障子からはがした茶色に煤けた障子紙やちり紙、二、三本の鉛筆をもらって、背後に死の影を負ったまま、書いておくことの責任を果たしてから、死にたいと思った。――

夢中で始めた洋子であったが、その作業は困難だった。――「しかし、なんと広島原子爆弾投下による死の街こそは、小説に書きにくい素材であろう。それを書くために必要な新しい描写や表現法は、容易に一人の既成作家の中に見つからない。私は地獄というのを見たこともないし、仏教のいうそれを認めない。人々は誇張の言葉を見失って、しきりに地獄といったし地獄図と言った。地獄というできあいの存在を認められないものの名で、そのもの凄さが表現できるものならば、簡単であろう。先ず新しい描写の言葉を創らなくては到底真実は描き出せなかった。」――

洋子は二重三重の苦しみの中で書く。

「書くためには思いおこさなくてはならず、それを凝視していると、私は気分が悪くなり、吐き気を催し、神経的に腹部がどくどく痛くなった――」

「書かなければならない」悲壮に思いきめて書いた。昭和二十年十二月悲痛な思いで書き上げられた。

しかし本は出なかった！ 占領軍のプレスコード（言論弾圧体制）の時代、その中で本は出なかった！

二十二年の初めの頃、本が出てないのにもかかわらず、諜報部から日本人通訳と二世将校が広島山奥玖島村にいる洋子のもとにやって来た。そして訊問が始まる。

二世将校は言う。「あなたに原子爆弾の思い出を忘れていただきたいと思います。アメリカはもう二度と再び原爆を使う事はないのですから。広島が出来事は忘れていただきたいと思います」洋子が答える。「忘れる事はできないと思います。忘れたいと思っても忘れない気がします。市民としては忘れたいと思っていますが、忘れるという事と書くということとは別です。作家は書きます。忘れる事をお約束はできません。」

プレスコードによって首を切られた記者や、つぶされた出版社が続々とあり、反した時は沖縄に送って重労働をやらされるという時代の中で、「日本で出版できなければ、アメリカへプレゼントします。」と言い切った。

この頃洋子は、共産議員の筧中某と二年足らずの結婚をしている。相手に子捨てまで強いた共同生活だった。しかし古い女の感情と仕事への情熱という矛盾をどうしようもなかった。失望と落胆と焦燥の日々のうらに、二人でしばしば死が言われ、泥沼のような明け暮れが続いた。「人間を愛する文字を書きなさい」という言葉を残して彼は去って行った。この「人間を…」という言葉が洋子に大きく残った。

昭和二十五年の初めにこの言葉をだいて執筆が始まる。

思い出すのもいやな原爆を吐き気をもよおしながら、原爆症の恐怖におわれながら、睡眠薬や抗ヒスタミン剤の常用で頭を麻痺させながら書いた。当時の一枚の写真がその事を物語る。異常に暗く、パーマネントの、のびた髪は、梳くのを忘れたように□□している。頬から耳にかけて痣のようにしみが広ろがり、眼は全く輝きを失って□□ぼうと開かれているのみ、一度に十才以上も年を重ねてしまった様な姿である。ここで書かれたのが「人間檻樓」である。

これを書き終えた翌年洋子は、とうとお不安神経症という症名で、東大の神経科に入院する。『半人間』の中にその時代の不安と、その中でも生きようともがく洋子の口がありありとうかがえる。

-原爆作家と呼ばれる事を嫌う作家の小田篤子(大田洋子)が大学の神経科に入院する。意識の覚醒と半覚醒のあいだに横切るさまざまな回想。…黒い赤ん坊を生んだ分裂症の同室の女。原爆被害者で、おちぶれてストリッパーの家の女中をしている女。原爆口がいつおそって来るかわからない不安。…二十五年六月に勃発した朝鮮戦争が第三次世界大戦への様相を呈してくる。連日、日本の基地から米爆撃機が朝鮮に向けて飛び立っていく。--原爆がまたおとされる。松川事件、下山事件、白鳥事件が相次ぐ。思想の弾圧が明からさまに行われる。「チャタレイ夫人の恋人」「裸者と死者」の発禁、言いたいことが言えない。どすぐろい不安……-----

この後、ヒロシマに迫る洋子の最後の最も執拗なたたかひの記録といえる「夕風の街と人と」が暗い時代に書き上げられた。

主人公の小田篤子(大田洋子)は1953年の夏、崩壊の街、広島を訪ねる。篤子は母の住む基町住宅に急ぐ。基町住宅は終戦直終に市の立てたバラックの戦災者住宅だが、今はどの家も朽ちて壊れかけ、雨がふれば、水道も瓦期の設備もない家には水がしみ込む、何千軒ともしれない集落に得体の知れない悪臭がただよう。その居住者たちは、「石ころと雑草と糞尿と塵埃の山を埋めた悪臭の町に住み馴れ、そこがどん底であることに麻痺している。」篤子はまた不法住宅の群れ、相生スラムを訪ねる。「原爆で身よりを全て失った老婆や引き揚者の一家や、闇酒を作っている朝鮮人口口道の真中までぼろぼろ道具を並べ立てている仕切屋の亭主、『とにかく戦争せにやならん、原爆で身内の者七人も失うたけえねえ、むしゃくしゃして、どこでもええ戦争せにやならん。』とわめく。篤子の合った人々はまた、口をそろえて市に不満をぶちまける。立ち退きばかり要求しながら替りの住宅はいっこう立てず、しゃにむに緑地帯、公園とうたい上げ、わり込んでくる。無用道路になるのではと言われる。百米通り、統計をとるだけのABCCの悪評。

東京から来た整形外科医、神山が耳がない人、唇がない人、両足の指が全部後ろ向きの人ケロイド で首がまわらない人、の手術をすることになった。その場に立ち合った篤子は何度も吐き、泣きながらその光影をノートに書き止めていく。そして思う。「これを見よ、人々よ、これを見られよ」と。また楠山弁護士は米団に対して損害賠償の情熱的な

話しをする。彼の話聞き終わった篤子は、希望が、たとえ持てなくても、自分の聞いただけの話を、スラムの連中に聞かせてやりたいと思うのだった。

ヒロシマの重い事実と、明日の存在の危機を三重にも四重にも感じ書かねばならないと思い決めて書きつづけた洋子。その重さにつぶされそうになり、うめきともつかない。沈痛な声は、「ヒロシマ」からのがれたいと言う。

ジャーナリストの「大田の作品は売れないから…」という本末転倒戦。今、全ての洋子の作品は絶刷である！<原爆作家>という誠意の欠けたレッテルをはり、毎年8月がくるたびにハイエナのように群がり、手垢のついたレッテル人間として平気で置き去りにしていく。昭和30年代池田反動内閣の再現、「もう戦争は終わった」というセリフが飛びかう。「太陽の季節」が文壇で力をもって来る。石川達三は洋子にこう言った。「大田さん原爆を書いたってもうだめだよ！」

今、平和都市広島が岡本太郎の前衛芸術まがいの、とりすましたモニュメント<平和>毎年おとずれるコウ例のヒロシマ祭り、平和幻想、白いヒロシマが作られていく。天皇が行き、佐藤が行った。着々と作られている！---「原爆後に入って来た人達ばかりがはぶりがよくなってね。生き残りは隅っこにおしやられている。白いかすのような広島が嫌いでね」と洋子は言う。その広島から「大田は原爆を売りものにしてている。名誉欲のために原爆を描いている。」また信じられない誹謗。「大田洋子は実際には被爆してないんじゃないか。被爆したふりをして原爆を売りものにし有名になったのではないか。」と

何も見きわめようとしない我々日本の中産階級の間人達に対し、洋子のぎりぎりにはりつめた声がとびかかってくる。

精神も肉体もぎりぎりにつかいはたし、血へどを吐く思いで書きつけた真実は、かるい手ごたえで空中に散り年をとってからの貧乏にあえぎ、貧乏人はものを書いちゃいけなかったんだ。本を読んでもいけなかったんだ、と言わせた！その悲痛な声にどうこたえるのか。

『水爆実験があつて、東京に死の灰と言われるものが降って来た。「ざまを見ろ」と思った。死の灰にまみれて、ぞくぞく死んでみるとよい。---そうすれば人間の魂が現代の不安に対して、そうあらねばならぬか、いくらか納得でき、心はゆさぶられるかもしれぬ。---』

それをうけた我々は、よし！死んでやる、死んだらうじゃないか、と答える以外、何が残っていよう！

一人の生きる事に忠実であろうとする人間をここまでおいおとして行ったのは8.6の日にだけおとずれ目をつぶる我々であり、また、それをとじこめている世界のありよう(平和都市の幻想)である。

我々が今どこにむかっていければいいのか、ここに一つの我々の背を赤く怒りをもってつきつける声がある。